



# カメラマン物語

第1話

犬も歩けば・・・

## 第1話 犬も歩けば・・・

---

『先生、相談があるんですが』

タブレットに入れている(ライン)に着信があった。

竜次からだ。

日景陽介は、それを確かめると『了解。場所はやっこさん。八時』

大学の授業が終わり、学校の前の電停から路面電車に乗っていた日景は、膝の上にタブレットをのせ返事を出した。

自宅のマンションの近くに小さな神社がある。日景は、そのそばの小さな割烹料亭「やっこさん」の奥のカウンターに陣取り、焼酎のお湯割りを魚の煮付けを肴に飲んでいた。

ガラガラと引き戸が開いた。

「いらっしゃい」

元気な美貴の声が狭い店内に響く。

竜次だ。

「遅くなりました」

「おお、来たか。座れ」

美貴が手際よく、おしぼりと箸、小皿を並べる。

「いらっしゃいませ」

「とりあえず、生ビール」

日景は、お湯割りを飲み干す。

「どうした竜次。相談事とはなんだい」

竜次は体の向きを日景に変えると、神妙な顔をした。

「先生、俺カメラマンになりたいんです」

日景陽介の表情は変わらない。

「いきなりだな」

日景は驚かない。

「大将、焼酎のお湯割りをもういっぱい」

カウンターの中の大将が黙って頷く。

「カメラマンか・・・そうか」

「先生ってプロのカメラマンでしょ。俺もやりたいんです」

先生と呼ばれた日景陽介は、大学の非常勤講師である。

結城竜次は、その大学の生徒だ。日景の授業の写真映像論を取っている。

写真部という事で、撮影の仕事を手伝わした事がある。それから竜次は日景のアシスタントみたいになっている。

「少しは将来の事を考えているんだな」

「はい。だいぶ悩みました。サラリーマンになる気はないんです。お袋と親父は反対しているん

だけど」

「うーん。ご両親の心配はわかるな。しかし何だってカメラマンを目指すんだ」

竜次はビールをぐいと飲む。

「先生も知ってるの通り、俺って成績も良くない。陸上部一筋だったから。だけど陸上じゃ飯は食えないし。写真は高校の時写真部だったからプロにあこがれていたんです。ほら、去年先生の手伝いで初めてコンサートの撮影のアシスタントをしましたよね。その時から何となく決めていたんです」

「あの時か・・・」

日景の本業はプロのカメラマンである。十年ほど東京でコマーシャル関係の仕事をしていた。関係と言ったのは、コマーシャル系の仕事と言っても幅が広いからだ。また食うためには色々な撮影をしていた。結局あんまりたいした仕事はしていない。

しかし、写真集は一冊だけ出版してもらった。ヨーロッパの旅行記のようなものだ。少しは売れたようだが、出版社からはそれ以来、話しは来なかった。

四十代から色々な学校から声がかかり、カメラマンと先生業の二叉を続けている。結婚はしたが離婚した。子供も3人いる。みんな大きくなってすでに社会人だ。

「先生。プロのカメラマンになるにはどうしたらいいんですか」

「東京行けば」

ぼそりと言った。

「俺は地元がいいんです。大学の就職課にきいたんですが、カメラマンになるには資格が必要だって言われたんです。先生は持っているんですか」

「資格か。俺はそんなもの持っていないよ」

たしかに写真技能士という資格がある。国家資格だ。

技能検定制度の一種で、都道府県知事（問題作成等は中央職業能力開発協会、試験の実施等は都道府県職業能力開発協会）が実施する、写真に関する学科及び実技試験に合格した者をいう。なお職業能力開発促進法により、写真技能士資格を持っていないものが写真技能士と称することは禁じられている。

「近所の写真館に飾っていたんです。それを取ればいいんですか」

日景は少し困ってしまった。

日景も資格の事はよくは知らないのだ。地元に戻り、スタジオを開業した時、写真師組合の存在を初めて知ったのだ。その当時の日景は若く、組合なんかには全く興味が無かったので参加しなかった。

「なあ、竜次。お前はどんなカメラマンになりたいんだ」

逆にきかれた竜次は、勢いが止まったようだ。

少し考えている。

「グラビアを撮影したり、ポスターや雑誌の表紙なんか撮影したいですね」

日景は無言だ。

竜次はそんな日景をみて、慌てて付け加えた。

「いや、これは希望です。そんなに簡単にプロのカメラマンになれるとは思っていませんよ。やはり何年か修行をしなくちゃとは思っていますけど・・・」

しどろもどろだ。

「竜次。正直に言おう。竜次がなりたがってるカメラマンなら、資格や修行は必要ないんだ」

「えっ そうなんですか」

「そうだ。何も必要ない。写真がうまけりゃいいんだ」

「どうやればうまくなれるんですか」

「そりゃ人それぞれだ」

「は一」

竜次は拍子抜けした。日景からいろいろ蘊蓄を聞かされると思っていたのだ。こんなあっさりした対応だと、不安になった。

「あっ、そうだ」

竜次はバックから袋を取り出した。

「見てください。最近撮影した僕の写真です。

街の夕日です。夕日って好きなんです。なんかドラマチックだから」

日景は差し出されたカビネ程度の大きさの写真をチラリと見た。パソコンでプリントしたものだ。

「あー 綺麗な写真だ」

日景の言葉は感情がない。

竜次は構わず話を続けた。

「でしょ。なんかもの悲しくって。右端の電車に光が当たって、何か感じたんですよ。どうでしょうか。僕はカメラマンになれますか」

日景は竜次の話の間、熱心に魚を食べていた。

「大将、このベラ美味しいね」

大将は板場で料理をしながら、日景と話す。

「この前、クロを釣に行ったら、ベラばかりつれたのよ。結構大きかったから、持って帰ってきた。どうだい、味は」

日景はうんうんと頷く。

「美味しいよ。ばあちゃんの味だ」

大将と日景は魚の話で盛上がっている。

竜次は自分の事を無視されてムキになっている。

「先生ったら、どうでしょうか」

「あー、なれると思うよ」

「先生、そんなに簡単に言わないでくださいよ。僕にとっては大事な選択なんです。僕は才能があるでしょうか」

竜次は真剣みだ。

日景は竜次に言う。

「いいか竜次、お前に才能があるかなんか、誰もわからないんだよ。1枚の写真で才能があるかないかの意見を求める方が無茶だぜ。

才能があるかないかは、きっと死ぬ前にわかると思う」

「死ぬ前？」

「ああ、俺はきつと思うんだ。死ぬ前に俺ってやっぱり才能がなかったんだなって」

「そんな・・・」

「あーそうだ。竜次。まだ卒業には1年ほどあるな。それじゃテストしようか」

「はい。どんなテストですか」

「竜次が撮った朝日の写真を見たい」

「えっ、朝日ですか」

「あーそうだ。朝日だ」

「そりゃ簡単ですよ」

「大将、日の出は今何時頃かな」

「日が出るのは、五時半くらいかな」

「五時半。結構早いですね」

竜次は少しひるんだようだ。

「俺って夜型なんですよ。五時半に撮影するとしたら四時くらいに起きなきゃならないんですよ。夜もバイトもあるし」

「いやだったらいいよ」

板場から大将が口を挟む。

「学生さん、朝日はいいよ。すがすがしい。

わしなんか3時頃起きて、車に乗って四時過ぎには海にいるね。日の出前には竿を出してるよ」

「エー 早いですね」

「朝が一番釣れるからな」

「二人とも釣が趣味だからですよ。僕はあんまりやったことはないし」

「そうだな。好きだから朝は大丈夫なんだ」

「わかりました。頑張ってみます」

「ベラはいつでも釣れる。だけどクロはそうじゃない。釣りというのは釣れる時間に、釣れる場所に行かないと釣れないんだ。だけど美味しいのはベラもクロも同じだ。それぞれのおいしさがある」

「はあ」

「朝日を撮るには、それなりの負担がある。

それはわかっている。だからこそ写真にも重みが少し加わるんだ。もちろん夕日だってすばらしい。しかし朝日の写真を見たいね。撮れるかい。写真が好きだったら撮れるんじゃないのかな」

「はあ」

「もし、竜次が自然の写真が好きだったら、自然の都合に合わせることだな」

「いや、特別自然が大好きだって事はないんですが・・・」

「うん、わかっているよ」

日景は少し真面目な顔をした。

「今まで自分の都合で撮れるものしか、撮ってこなかったんじゃないかい」

「そんな事はないですけど。いろいろ写真のために旅行したりしましたよ」

「そうか、まあ頑張って朝日を撮ってごらん。

写真というのは量も大切なんだ。たくさん撮ったからこそわかることもあるのさ」

「はあ、あっ先生。この夕日の写真の評価はどうでしょうか」

日景は押しつけられた写真をチラリと見ると「大将、この写真欲しいかい」と声をかける。

作るのが一段落していた大将は「どれどれ」と手を伸ばした。

「うーん。いらないよ。こんな夕日なら毎日本物が見れるからね。夕日だったら岩瀬から見る夏の海の夕日が絶景だな。大きくて真っ赤だ。わしはあれを見る度に、自然てすごいなーと思う」

写真を返された竜次は慔然としている。

「残念だった竜次」

「わかりました。もう帰ります。ビール代置いていきますね」

竜次はビール代四百五十円をカウンターに置いて店を出て行った。

「有り難うございました」

美貴が元気よく見送る。見送ったあと心配そうに日景に近寄った。

「先生、もっと褒めてあげればよかったのに。

なんかしょげて帰ったじゃない。先生らしくないわね。私たちの高校の先生だった時、先生は生徒を褒めるのがうまいって評判だったのに」

日景は、5年ほど私立高校の商業デザイン科の非常勤講師もしていた。美貴はその時の生徒だ。

「そうかい。だいぶん持ち上げたつもりだったけどな。何でもそうだけど、プロの道は大変なんだよ。なあ大将」

大将はカウンターの奥で頷いた。

竜次は経済学部の3年生だ。

しかし、経済学を学ぶために大学に入ったわけじゃない。

ほとんどの学生がそうであるように、竜次もやりたい事が見つからないのだ。

高校の時は体操部だった。真剣に体操はやったが、能力はそこそこだった。床や跳馬、鉄棒は好きだったが、吊り輪や平行棒、鞍馬が苦手だった。特に吊り輪は腕力が足りずに散々だった。腕力トレーニングも一生懸命やったが、いっこうに十分な腕力を得る事が出来なかった。どうも地味な力業よりも、跳んだり跳ねたりする方が性に合った様だ。鉄棒は、その当時C難度の大車輪からの伸身宙返りの着地をやってのけ、みんなをびっくりさせた思い出がある。ささやかだが、それだけが誇らしい記憶として残っている。

大学進学は何となくだった。高校の成績はたいしてよくなかったので、入れるところならば何処でもよかった。家はそれほど裕福でなかったなので、授業料が一番安いところを選んだ。

何の感動もなく大学生になった。

夏くらいに、クラスの仲間と女子大の同じ1年生と合コンをした。

その時知り合った女子がカメラ好きのカメラ女子だった。しかしその女子の写真知識はハイレベルで、適当な知ったかぶりの竜次はまったく相手にされなかった。

竜次は高校時代は全くモテなかったの、なんとか彼女が欲しくて必死だった。そこで親父のカメラを持ち出しカメラマン気取りで再びその子に近づいたのだ。

それで、写真をやろうと思ったのだ。

大学に写真部があったので友人と一緒に入った。しかし主に飲み会だけの部員だ。当然のめり込んではいない。とりあえずやってみるか程度である。写真部という肩書きだけが欲しかったのだ。

女子大の女の子は美穂ちゃんといった。竜次のかなりしつこいアタックが功を奏して、何とか友達レベルまで近づく事が出来た。

しかし、1年たっても友達以上にはなっていない。

来年3年生なので、就職の事が頭をよぎる。仲間は就職活動をやっている奴も多い。

竜次の成績はサイテーでみんなが入れるような一流企業など無理なのはよく解っている。写真部の先輩達も就職が決まり、身ぎれいになって卒業を待っている。

無為の時間が過ぎていく。二十歳を過ぎても進路が定まらないのだ。竜次は写真部の部室でごろごろしていた。そして思いついたのが「カメラマン」だ。

日景先生の「朝日」を撮る事を考えていた。

特別難しい事ではないと思う。朝早く起きて写真を撮ればいいんだから。

しかしそんな簡単な事をプロカメラマンの日景先生が言ったとは思えなかった。

竜次は成績はよくないが、勘だけはよかった。

「そうだ。美穂ちゃんに相談してみよう」

そう決めると早速メールをだした。

美穂ちゃんは二十歳を過ぎてどんどん綺麗になっていく。将来は写真の道に進むらしい。

その事もまぶしく感じてしまう。

20分くらいたって美穂ちゃんからOKが来た。

「やったー」

竜次はガッツポーズ。

美穂が指定したのはアンティークで囲まれたおしゃれな喫茶店だった。時間通りにその店に入ると、窓際に美穂が座っていた。

栗色のロングヘヤーにピンクのブラウス、細身のジーンズにハイヒール。足下には小さめのカメラバックが置いている。

クールビューティーだ。

美穂はめざとく竜次を見つけると、手招きをした。

竜次は朝日の件を話す。

「あの先生がいうんだから、撮りに行けば」

美穂はすまして紅茶を飲んでいる。

「そうだけど、自宅のアパートから朝日を撮っても、つまらないし、どうしようかなと思ってるんだけど」

「そうね。やはり山の上とか、海から出る朝日なんか綺麗そうだね」

「ネットで調べたけど、綺麗な写真ばかりなので、案外難しいそうな気がするんだ。美穂ちゃん、朝日を撮る時のコツは」

「えー、朝日なんか撮った事はないわ。特にコツはないんじゃないの」

「そうだな。とりあえず近場の山に行ってみようかな。美穂ちゃんも行かないか」

「そうね。興味はあるけど、朝早いでしょ。」

私って朝弱いよね。やっぱり行かないわ」

「わかったよ。冷たいな」

美穂は竜次と同じ2年生だった。美術部だったが、デッサン力が弱いと言われ写真に転向した。もともと才能があったかも知れないが、カメラ雑誌に投稿した写真が派手に取り上げられ、「カメラ女子」の先鋭ともてはやされている。

「竜次」は単純だけど嫌いではない。断っても食らいついてくる行動力は認めている。

写真については相手にならない。素人以下だし、センスも全く感じられない。

しかし、ちょっと気になるところがある。

一度一緒にカメラを持って桜を撮りに行った事があった。ふざけてばかりいる竜次だったが、カメラを構えた時に、妙に様になっていた。竜次が撮影している姿が、一瞬プロみたいと思った時があったのだ。

格好つけているわけでもなく、カメラと一体になっていた。その事が妙に気になって、いまだに誘いに乗っている。

朝日の話に美穂が乗ってこないの、さすがの竜次も帰っていった。

竜次が帰った後、紅茶を飲みながら、美穂は「朝日」の撮影の事を考えていた。

竜次が先生と慕っている「日景陽介」のことを調べてみた事がある。

「写真集」をだしているれっきとした写真家だった。何ページか写真が載っていたが重厚で濃密な写真だった。その中にスペインの風車の写真があった。「カンポデクリプターナ」という地名が載っていた。

文章が添えられていた。

風は風のように

雲は雲のように

それだけの文だった。その言葉が心に残っていたのだ。



そんな写真家がなぜあんな竜次の先生なのかも理解できなかった。  
竜次に何か特別の才能があるのかも知れない。そんな思いもよぎる。  
「朝日ね。私も撮ってみようかな」

ぼんやりとそう考えていた。

その時、美穂を見つけて声をかけてきた男性がいた。

「美穂さん」

美穂は振り返った。

天道啓介だ。天道はプロのファッションカメラマンだ。カメラ仲間とレンタルスタジオを見学に行った時、仕事が終わったらしい天道から声をかけてきたのだ。

細面のイケメンだ。それにプロのカメラマンで仕事もたくさんしている。

竜次とは比べものにならない。

「どうしたんですか」

「いや、美穂ちゃんを探していたんだ。今日よかったら夕食を食べないかなーと思って。

美味しいフランス料理の店を見つけたんだ」

くさい台詞も天道が言うとさまになっている。

「えー。ほんとですか。嬉しい」

美穂は即決だ。

そんな展開も知らず、竜次は自宅に戻っていた。

ネットで朝日のでる時間を調べた。

朝5時頃のような。原付バイクで山に行くのはしんどいけれど、標高300メートルほどの愛宕山に明日行こうと決めた。

カメラバックにカメラを入れて準備OKだ。

今持っているカメラはキャノンのイオスキスデジタルというカメラだった。父親がカメラ好きで、出たばかりのデジタル一眼レフを買って、竜次を撮りまくったという。今は2013年。イオスキスデジタルは2003年発売だから10年前、竜次が小学4年生の頃だ。

ボディはシルバーで、レンズはズームレンズがついている。調べたら35mm135mmF5.6。

このあたりになると、竜次は得意ではないのでよく解らない。

シャッターを押せば写るので、別に知らなくても困りはしなかった。

頂上まで道路が完備されていて、夜景のスポットになっている山だ。

朝起きるのは苦手なので、徹夜するにした。

一晩中テレビゲームですごし、4時頃にカメラバックを提げて50CCのスクーターにまたがりスタートした。まだ街は暗い。

徹夜なので頭はさえている。

思えば早朝の街を走るの、生れて初めてかも知れない。

「すがすがしい」

竜次は柄にもなく高揚している。

たまに通るトラックのヘッドライトがまぶしい。それさえも新鮮だった。

30分ほどで登山道の入り口についた。少し明るくなり始めている。

真っ暗だった回りが僅かだが、グレーになった様だ。

曲がりくねった道だ。

5000のエンジンを吹かしながら淡々と走っていたら、道の真ん中に大きな犬のような動物が突然視界に入った。

「うわっ」

竜次は驚いた。

急ブレーキをかける。

細いタイヤはスピンし、車体が流れ倒れ込んだ。

その黒い大きな獣はじっとこちらを見ている。

黒いビー玉のような怖い目だ。

倒れ込んだ竜次とその獣は一瞬目が合った。

「猪だ」

大きな犬というのは間違いで猪だったのだ。

猪を実物で見たのは初めてだったが、間違いなく、ほんの10メートル先の獣は猪だった。

怖いと言うより驚いたのだが、カメラを持っている事に気づいた。

大慌てでカメラを取り出し、ファインダーを覗いた。猪はそんな人間の動きに反応して、道の脇に走った。

一瞬だった。

夢中でシャッターを押したが、暗いのでスローシャッターの上、ピントが合わずにシャッターは押せなかった。

今のデジタルカメラは被写体にピントがロックされないとシャッターが落ちないのだ。

「残念。しかし、びっくりしたなー。こんな町のそばの山に、猪がいるなんて信じられん。しかし、撮りたかったなあ」

竜次はよろけて立ち上がった。派手に転倒したのに怪我はしていないようだった。

転倒したバイクのところに近づいたら、すごい獣の鳴き声がした。鳴き声の方を見ると、人が落ちないように作られている鉄の柵のところへ猪は突っ込んだらしく、首が柵の間に挟まっていた。

大きな猪が苦しんでもがき暴れていた。

「すごい」

その実物の獣のリアルさは竜次に衝撃を与えた。

すかさずカメラを取り出した。その時に朝日がサーと地面を掃くように差し込んできた。

その朝日が暴れている猪に当たった。

明るさは十分だ。

竜次はシャッターを押す。今度はピントが合ったのだ。

カシャンカシャンカシャン無我夢中で撮り続けた。

猪の暴れ方はすごかった。頑丈そうな柵だったが、いつの間にか首が抜けようだ。うなり声を一声上げて、その柵を跳び越えて藪の中に消えていった。

竜次は呆然としていた。

何秒かの出来事だったのだが、竜次は体が震えていた。興奮だ。

我に返った竜次は回りをみまわした。

「しまった、朝日は昇ってしまった」

すっかり明るくなっていた。

「やっこさん」の扉がガラガラと開いた。

「いらっしやい」

何時もの声が聞こえた。

「先生、約束の写真を撮ってきました」

「おお」

日景は振り向いた。

「ま一座れ」

「はい」

竜次はビールを頼み、あらたまった顔をして鞆から写真を撮りだして日景に差し出した。

日景はその写真をじっと見た。

特別美しいという写真ではない。

山の稜線から太陽が顔を出している瞬間の写真だ。

日景はなぜかニコニコしている。

「間違いなく朝日の写真だ」

そして2枚目の写真を見た。

日景が驚いた。

「すげーなーこの写真。大将見て見なよ」

そうやって厨房の大将に見せた。

「おーでかい猪だな。どこにいたんだ」

竜次の鼻がぴくぴく動いた。

「いやー、たいしたことはないんですが」

「この猪、すごい顔をしてにらんでるぜ」

竜次は得意満面だったが、我慢していた。

がついに我慢できなくなった。

「でしょ。イヤーすごい猪でした。この猪は愛宕山にいたんですよ。あの愛宕山ですよ。

びっくりしましたよ」

ほう大将と日景はその話しに乗ってきた。

「僕はすかさずカメラを構えて、冷静にシャッターを切ったんです。カメラマン魂って奴ですか

。僕の天性の才能が、そうさせたような気がするんですが」

「おいおい。いい加減にしろ」

日景がたしなめた。

「竜次。どうだった。朝日は」

「ああ。はい。どおってことなかったです」

「そうか」

「はい、誰でも撮れますよ。朝日は」

「そうだな。これだったら誰でも撮れる写真だ」

「すごい写真はこの町じゃ駄目だと思います」

「うん、何処ならとれそうかい」

「富士山とか、太平洋の真ん中のイースター島とかですかね」

「そこに行けばいいんじゃないか」

「えー、そんなところ行けませんよ」

「ふーん、カメラマンだったら行くんじゃないかい」

「えっ」

「竜次、色んな写真があるけど、そこに行かなくちゃ撮れない写真がある。釣りと同じだ」

厨房の大將も頷いた。

「はい」

「それも又大切な事だよ。この猪だって、朝早く山に登ったから撮れたんだろう」

「いやーすごい猪でした。偶然とは言えびっくりしました。そしてたまたまカメラを持っていたので撮れましたけど」

「そうだ。ラッキーだった。しかしそれもお前が行動したからだ。運も実力のうちって奴だ」

「はあ」

「カメラマンになりたかったら、色んな所へ行ってみな。そして色んなものを撮るんだ。たくさん撮らないと解らない事がある」

「なるほど」

何となく解ったような顔をした。

「僕はカメラマンになれますかね」

「その答えは、まだ早いんじゃないか。こんな朝日の写真じゃ誰も感心しないよ」

「はあ」

竜次は納得がいかないようだった。

「さっき先生は、誰でも撮れるといましたよね」

「そうだ」

「朝日の写真は誰でも撮れるんだったら、いくら撮ってもプロのカメラマンになれないと思います」

「ほー、そうしたら竜次はどんなカメラマンになりたいんだ」

「どんなって・・・」

竜次は「格好いい」という言葉をのみこんだ。

どうせ馬鹿にされるに決まっているからだ。

少し考えた。考えたがうまい答えが出てこなかったからだ。

「なあ、竜次。今の小型カメラはデジタル化が進み、プログラムオートにすれば誰でも、写真は撮れる。だから誰にも撮れない朝日を撮れたらすごいんじゃないか」

「そうですけど……。それってカメラマンのセンスとか技術とは関係ないように思えるんですけど」

日景は黙って微笑んだ。そしてカバンから1枚の写真を取り出した。

「昨日、美穂ちゃんという女の子が、俺のところにやってきてこの写真を置いていった。竜次の写真とどちらがいいか比べてくださいって言ってたよ」

「えー美穂ちゃんがどうして」

竜次はびっくりした。

「これが彼女の写真だ」

竜次はその写真を見た。

部屋の中の写真だった。

一輪のバラが細いおしゃれな花瓶に挿されている。

窓のカーテンの隙間から太陽の光がかすかに差し込んでいた。逆光だが、全体は真っ暗ではなく、その光は、バラの輪郭に輝いていた。

日景はその写真を見ている竜次に話す。

「これも朝日の写真だな。女性らしい趣がある」

竜次は、複雑な顔をした。

やられたと思った。

朝日の写真といわれて、地平線や水平線から昇る朝日しか思いつかなかったのを悔やんだ。

「わかりました。出直してきます」

竜次はやっこさんから出て行った。

美穂ちゃんの顔と、朝日と猪の顔が何故か浮かんだ。

竜次は意外とナイーブなのだ。

高校の時、町内大会の100メートル競争で中学生に負けて最下位になり3日ほど寝込んだ事があった。

美穂ちゃんに出し抜かれたという思いで訳がわからなく無くなって、落ち込んでしまったのだ。そして、その日の夜は布団をかぶって寝てしまった。

「竜次。大変よ」

翌朝、竜次の母親が二階の竜次の部屋に飛び込んできた。

「どうしたんだよ。かあちゃん」

竜次は布団から寝ぼけ眼で顔を出す。

「新聞にあんたの写真が載っているわよ」

「えー」

竜次は新聞をひったくって見てみた。

地元記事のページの真ん中に、確かにやや大きく【愛宕山に猪出現！】という記事があり、あの猪の写真が載っていた。

さらに【カメラマン結城竜次氏撮影】と書いてあった。

「あんたすごいわね」

母親は目を丸くして感心している。

「あっ。先生の仕業か」

その時、携帯にメールが入った。

美穂からだった。

『負けたわ。カメラマン。ハートマーク』

「おーハートマークがついている」

竜次は、がばっと飛び起きた。

「竜次。復活しまーす」

これがカメラマン竜次のスタートだった。

## 日景カメラマンからの解説

朝日を撮る場合、その場所とシュチエーションをどうするかが大切だ。

カメラの設定は通常で問題ない。レンズも自由だ。ただ太陽を直に撮りたいなら、NDフィルターを使うなどの配慮は必要。

直接朝日を撮るか、間接的な表現を使うかはカメラマン次第、発注者次第だろう。しかし大切なのは、一つの言葉でどれだけたくさんの絵が頭に浮かぶかという事だ。本人の引き出しの多さが、写真に奥行きと物語を付け加える事が出来るのだ。

## カメラマン物語 (1)

<http://p.booklog.jp/book/80790>

著者 : artworks

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/artworks/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80790>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80790>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ